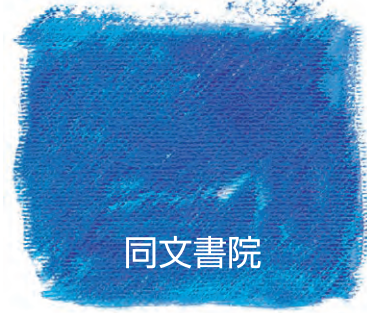
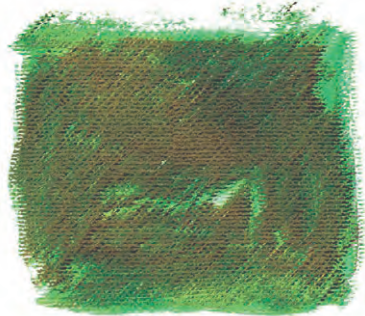


保育内容・言葉

岸井勇雄・無藤 隆・湯川秀樹
[監修]

太田光洋
[編著]

内藤由佳子・大迫秀樹・田口鉄久・白澤早苗
片山順子・齋藤二三子・岸 美桜・中山美知子
[著]



はじめに iii

第三版の刊行にあたって v

第1章 子どものことばと育ち 1

1. ことばの育ちを支えるもの 1
2. ことばはどのような機能をもっているか 5

第2章 領域「言葉」とはなにか 11

1. 保育の基本と領域「言葉」 11
2. 領域「言葉」のねらいと内容 15
3. 領域「言葉」と他の領域との関係 21

第3章 ことばはどのように育つのか—ことばの発達— 27

1. ことばの発達をめぐって 27
2. 初語のころまで 29
3. 幼児期前期 31
4. 幼児期後期 35
5. ことばの発達の背景にあるもの 39

第4章 子どものことばと保育者—どうとらえ、どう関わるか— 43

1. 子ども理解 43
2. 遊びのなかでの関わり 47
3. 活動のなかでの関わり 52
4. 保育者の関わりの諸問題 56

第5章 特別な配慮が必要な子どもとの関わり 61

1. ことばの発達が気になる子 61
2. 保育者はどのように関わるのか 67
3. 保護者との関わり 71
4. 専門機関との連携 73

5. 保育者の姿勢 74

第6章 うたや触れあいを楽しむ遊び 77

1. わらべうた 77
2. 手遊び・うた遊び 93

第7章 絵とことばの豊かな世界を楽しむ—児童文化と内容— 101

1. 絵本とは 101
2. 紙芝居 126

第8章 劇や物語を楽しむ—児童文化と内容— 133

1. パネルシアター 135
2. エプロンシアター 141
3. ペープサート 146
4. 人形劇 150

第9章 想像やことばのリズムを楽しむ—児童文化と内容— 155

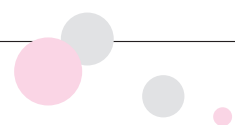
1. 素話 155
2. ことば遊び 167

第10章 ごっこの世界から劇遊びへ 173

1. ごっこ遊びと劇遊び 173
2. 劇遊びと表現 175
3. 年齢別発達における絵本・ごっこ・劇遊びの実際 175

おわりに 193

索引 194



領域「言葉」とはなにか

- 〈学習のポイント〉
- ①子どもの豊かなことばを育む環境について考えてみよう。
 - ②さまざまな年齢の子どものことばの特徴を理解しよう。
 - ③領域「言葉」と他領域との関わりを理解しよう。

1. 保育の基本と領域「言葉」

1 子どもからの保育

今からおよそ100年前のドイツでは、「子どもから (vom Kinde aus)」というスローガンのもとに、子どもの存在を認め、子どもを教育の出発点とする教育改革運動が展開していた。今日においても、目の前の子どもを原点に置き、一人ひとりに寄り添うことが保育の基本であることに変わりはない。

乳幼児期の子どもは、与えられた知識や技能を一方向的に教え込まれるのではなく、自らの興味や関心に沿って環境と関わり、自分に必要なことがらを身につけていく主体的な存在である。したがって、保育においては、いかに子どもの世界を広げ、さまざまな経験を可能にする環境を整えるかということに主眼が置かれるべきである。『幼稚園教育要領』においても、子どものこのような特性を踏まえ、「幼稚園教育は環境を通して行うこと」を明言している。

先に述べたドイツ教育改革運動において、子どもを学びの主体とする教育実践の中心的な役割をつとめたB. オットーは、子どもの主体的な活動を導く原則として、①子どもの興味・関心から始めること、②対象との直接的な関わりを重視すること、③活動は子どもとの対話によって柔軟に構想すること、の3点を挙げている。つまり、子どもを取り巻くさまざまな活動は、子どもの興味・関心を出発点に、子どもが主体的にことがらに関わる活動を通じて、子ども自身が対象に気づき、発達に必要な経験が十分なされるよう導くことが大切である。さらに、それらの活動は、あらかじめ固定的に計画されるのではなく、子どもとの話し合いによって、ともに作り上げていかなければならないとされている。このように子どもが主体的に対象と関わり、ことばや活動において自己を発揮することのできる自由（環境）を保障することは、保育者の重要な役割であるといえる。

『幼稚園教育要領』および『保育所保育指針』では、ともに幼児の教育は「環境を通して行うこと」を基本としている。保育においては、幼児にふさわしい生活を可能にし、必要な経験を得ることのできる環境をつくることが重要である。

表2-2 『幼稚園教育要領』における5領域のねらい

健康	健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う。
人間関係	他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心の心を育て、人と関わる力を養う。
環境	周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。
言葉	経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。
表現	感じたことや考えたことなどを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。

「ねらい及び内容」においては、「各領域に示すねらいは幼稚園における生活の全体を通じ、幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連をもちながら次第に達成に向かうものであること、内容は幼児が環境に関わって展開する具体的な活動を通して総合的に指導されるものであることに留意しなければならない」とされている。さらに、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿が、ねらい及び内容に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿であることを踏まえ、指導を行う際に考慮するものとする」ことが挙げられている。これは、5領域のねらい及び内容を達成することで、「乳幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（第1章総則 第2幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」）の実現を図ることが期待されていると言える。

1 総合的な指導

『幼稚園教育要領』および『保育所保育指針』で示されている領域という考え方は、小学校の教科のように知識を伝達するために存在しているのではない。したがって、領域ごとに区分した指導が行われるということはない。5領域に示されている内容は、幼児が環境に関わって展開する具体的な内容を通して、相互あるいは同時に関連しあい、保育者によって指導援助されるものでなければならない。

たとえば、鬼ごっこをしている場合でも、仲間との「人間関係」をうまく結ばなければ、遊びは展開することができないし、ルールや順番を決める際には「言葉」での話し合いも重要な役割を果たす。また、自分なりの鬼役を「表現」することや、自由に走り回れる園庭や玩具も「環境」として重要であり、「健康」は元気に活動するための基本といえる。このように、幼児の活動は、ひとつの領域に限定して行われるものではなく、幼児の生活にふさわしい活動が展開される限り各領域は相互に関連し、その指導は必然的に総合的なものとなるのである。

ここで注意しなければならないのは、「総合的指導」ということばにとらわれて、保育者が幼児の活動すべてに各領域の要素を文脈を考えずに取り入れることのないようにすることである。総合的指導とは、幼児の生活や遊びのなかに自然と表れてくるものを、各領域に示されている育ちの系統性を視野に入れて保育者が見通しをもって援助していくことである。幼児が取り組む活動全体を通して、幼児一人ひとりがなにごとに気づき、なにを身につけることを目指すのか、保育者の側で総合的なねらいをもつことが重要となる。

2 領域「言葉」の内容と他領域の関係

先に述べたように、5つの領域は幼児の活動において相互に関連している。それでは、具体的に領域「言葉」の内容と他領域がどのように関わっているかについてみてみよう。

幼児の「言葉」の発達を考える際、表面に表れたことばのみで子どもの思いを推し量ることはできない。幼児の発することばにはその子なりの意味や背景があり、一連の流れのなかでとらえられなければならない。また、幼児はことばには

表2-3 領域「言葉」と他領域の関わり

領域	関連するねらいと内容	
健康	ねらい	(1) 明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。
	内容	(1) 先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動する。 (4) 様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。
人間関係	ねらい	(2) 身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。
	内容	(1) 先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。 (2) 自分で考え、自分で行動する。 (5) 友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感し合う。 (6) 自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。 (9) よいことや悪いことがあることに気付き、考えながら行動する。 (11) 友達と楽しく生活する中できまりの大切さに気付き、守ろうとする。
環境	ねらい	(3) 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。
	内容	(1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。 (2) 生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。 (5) 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。 (6) 日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。 (10) 日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。
表現	ねらい	(1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。 (2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
	内容	(1) 生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。 (2) 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。 (3) 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。 (8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。

と話した子どもがいた。担任保育者であればこれだけのことばであっても、父親の出勤を玄関先で母親とともに日々見送る子どものかわいい姿が目に見え、目に見えなくも。「今日もお父さん元気に会社へ行ったね」「会社から帰ってきたら遊んでもらえるね」と保育者も受け止める。園における日常的な会話を大切にすることが、ことばを使うことへの自信と喜びにつながっていくのではないだろうか。そのためには、まず、子どものことばを聞くという保育者の姿勢が求められる。

園では一人ひとりの子どもが自分の思いをもって生活を送っている。一人ひとりのことばに耳を傾け、その心を理解して対話することが子どものことばの育ちを促すことにつながる。

2 自由遊びのなかで

子どもは園で仲良しの友だちと、好きな場所で、十分な時間をかけて熱中して遊びたいと願っている。幼稚園・保育所は子どもが自発的に行う自由遊び、すなわち“自ら選んでする遊び”を大切にしている。自発的な遊びをするなかで、子どもはさまざまな能力を発達させるからである。遊びは子どもに意欲、創造性、友だちとの望ましい関係、社会や自然に関する知識、イメージの豊かさ、健康な体、豊かなことば…を育てる*。ここでは1歳児と5歳児の遊びの姿から、ことばの育ちをみてみよう。

事例4-4 1歳児8月・アムアムおいしいね

M子はフェルトでつくってあるすしを皿に乗せて「アム、アム」と食べる振りをする。続いてすしをつまむしぐさをして保育者にも食べさせる。保育者は「シュルシュル、おいしいね」と食べる振りをした。M子は「おせんべ、たいた、かぐ、おいしー？」とことばを並べ、会話をしているような雰囲気であった。

近くでその様子を見ていたA子は「ゴチゴチ、ゴシゴシ」と皿を洗う振りをした。保育者が「きれいになったね」と声をかけると、A子は「きれい」と答えた。続いてM子がスカートとエプロンを持ってきて、保育者に「して」と言うので、着せてやり、「どうぞ」と言う。同じようにA子も持ってくるので、着せると嬉しそうに「ハッピーニューニューー、ハッピーニューニューー」と（ハッピーバースデーのうたを）繰り返し歌う。

2人は再び皿にすしや果物を乗せて保育者に食べてもらおうと思い、「どうぞ」と差し出す。保育者と2人の子どもで「アムアムおいしいねー」とご馳走を食べる遊びが繰り返された。

*「幼稚園教育要領」では「遊びは心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習である」と述べている。また「保育所保育指針」では「乳幼児期にふさわしい体験が得られるように、生活や遊びを通して総合的に保育すること」と述べている。子どものことばも遊びを通して培われている。

ことばを話し始めたころの子どもの会話は限定的である。しかし、そこには子どもの願い、イメージ、生活などが豊富に詰まっている。それを受け止めて、同じ遊びの流れのなかで返していくのが保育者の役割になる。そうすることによって場に応じたことばの使い方、コミュニケーションの取り方、ものの名称などが子どものことば表現として定着していくことになる。

事例4-5 5歳児9月・忍者遊び

4人の子どもが1列に並び、少し腰を低くして足早に園庭を移動している。4人は“森”（木の茂ったところ）で止まり、「ここをほろう」と言って手にしていた小さなスコップで地面を掘り始めた。しかし固くて思うように掘れない。すると隊長（レッド）のK男が「よし、すなばへいこう」と走った。忍者になった4人が“宝”を探している。

K男が砂のなかから小石を見つけ、「たからがあったぞ!」と叫ぶと、イエローのM男が「アッ、ホントだ、たからだ!」と応じる。特別な石でもないが、砂を払って眺める。そしてバケツに水を汲み、石を洗う。「たからが見つかったらここへいれよう」と言った。

近くでその様子を見ていたY男が「スコップでほらなくても“いぬかきのじゅつ”があるじゃないか」とつぶやくと、4人はスコップを手放し、まるで犬のように素手で勢よく砂を掘り始めた。さらにY男は「ボク、じつはすなのなかにダイヤモンドをいれたんだけどなー」と言うので、ますます宝探しに熱が入る。

しばらく砂場で遊んだ後、副隊長（ムラサキ）のM子が「いまからたびにいこう」「しゅんかんいどう」で“ワケワケ”でできをさがしにいこう」と言って二手に分かれ、園舎の裏へ走って行った。

5歳児ともなると、ことばや行動で共通のイメージをつくり、楽しい遊びを展開する様子がわかる。ことばもはるかに豊かさを増し、おとなにも通じる話ができるようになる。子どもはおとなからもことばを学ぶが、実は子ども同士の自由な遊びのなかでことばを豊かに学びあっているといえるのではないか。充実した遊びが展開される保育のなかで、子どものことばは育つのである。

3 ごっこ遊びを通して

ごっこ遊び^{*}では参加者がイメージを共有するためにことばと体による表現が不可欠である。自分の思いを仲間に分かってもらおうと、相手にわかるような説明をする。自分が理解できないときは説明を求める。子どもはこうしてことばを

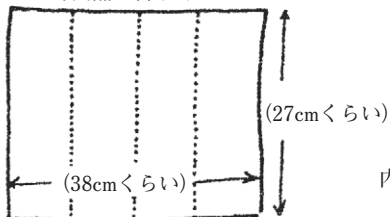
*子どもが自発的に行うイメージの世界の遊びが「ごっこ遊び」であり、幼児期の代表的な遊びのひとつである。ままごと、お店屋さん、乗りものごっこなどがそれにあたり、数人がそれぞれの役割をもって遊ぶ。イメージすることができるようになった子どもが行う初期のごっこ遊びは見立て・ふり・つもり遊びであるが、ことばの発達などによって子どものイメージする世界はさらに豊かなストーリー性を帯び、集団的なごっこ遊びへと発展していく。

ごっこ遊びについては今井和子『なぜごっこ遊び?』（フレーベル館）、八木紘一郎『ごっこ遊びの探求』（新読書社）、河崎道夫『あそびのひみつ』（ひとなる書房）、などが参考になる。

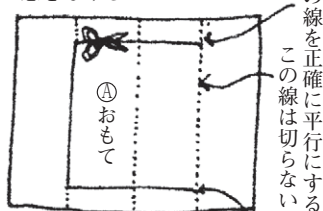
[替わり絵本の作り方]

お話遊び **どんなお話？**

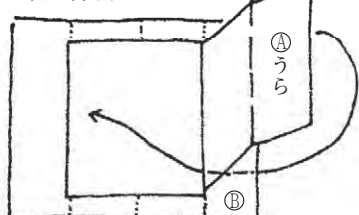
- ①少し厚めの画用紙を使う
四つ等間隔に折りぐせをつける



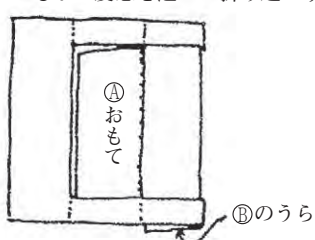
- ②はさみかカッターで切って
窓をあける



- ③Aを折っておこしてBと一緒に
裏へ折り返していく



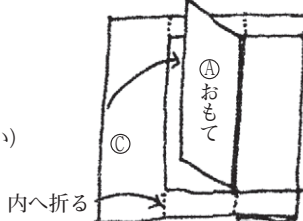
- ④裏からまわってきたAを
もう一度窓を通して折り起こす



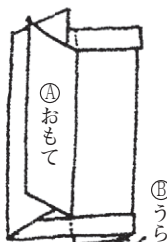
◎遊び方

替わり絵カードに描いた絵をもとに、好きなお話を作って遊びます。四画面の順番を替えたりして皆さんの創造的なお話遊びを楽しませます。

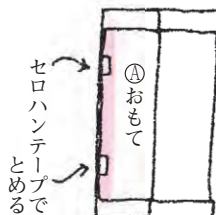
- ⑤Cを右へ折りおこす



- ⑥CをAの下へ入れる



- ⑦AとCの端をセロハンテープではり合わせる。
図の赤い部分全体をはりあわせ、セロハンテープではりあわせる。



- ⑧一つの面を閉じて裏がわを開けると別の面が出る。これが4回できるので、それぞれの面に絵を描く



◎指導のポイント

- ・低年齢の場合は、保育者が作っておき、自由に触って遊べるようにしておきましょう。
- ・一斉指導ではなく、子どもの興味に応じて作れるよう材料を用意しておくとういでしょう。

図7-3 替わり絵本(2) (筆者作成)

年齢別 絵本参照リスト

(0歳児から2歳児向き)

No	書名	作	絵	出版社
1	いないいないばあ	松谷みよ子	瀬川康男	童心社
2	いないいないばああそび	きむらゆういち		偕成社
3	もうねんね	松谷みよ子	瀬川康男	童心社
4	ばいばいおっばい	正高信男	あきやただし	鈴木出版
5	わんわんなにかな	正高信男	あきやただし	鈴木出版
6	もこもこもこ	谷川俊太郎	元永定正	文研出版
7	たまごのあかちゃん	かんざわとしこ	やぎゆうげんいちろう	福音館書店
8	てんてんてん	わかやましずこ		福音館書店
9	きんぎょがにけた	五味太郎		福音館書店
10	ばいばいまたね	とくながまり	みやざわはるこ	アリス館
11	いただきまます	わたなべしげお	おおともやすお	福音館書店

(2歳児から3歳児向け)

No	書名	作	絵	出版社
1	ぞうのボタン	うえののりこ		富山房
2	やさい	川上越子	川上越子	鈴木出版
3	さよならさんかく	わかやまけん		こぐま社
4	するするする	上野岑三	上野岑三	鈴木出版
5	うんこ	みやにしたつや	みやにしたつや	鈴木出版
6	おっばい	みやにしたつや	みやにしたつや	鈴木出版
7	るるるる	五味太郎		偕成社
8	あんぱんまん ばいきんまん	やなせたかし	やなせたかし	フレーベル館
9	うずらちゃん かくれんぼ	きもとももこ		福音館書店
10	おさんぼしましよ	井上洋介	井上洋介	鈴木出版
11	コロちゃんはどこ？	エリック・ヒル	エリック・ヒル	評論社
12	たまごにいちやん	あきやただし	あきやただし	鈴木出版
13	はけたよはけたよ	神沢利子	にしまさかやこ	偕成社

この3つのパターンを使って、物語やクイズ、うた遊び、数遊びなど、さまざまに活用して欲しい。

2 パネルシアターを作る

パネルシアターの作成はむずかしいものではない。舞台や絵人形には市販の完成品もあるが、簡単に手作りすることができるので、彩りや仕掛けに工夫を凝らしながら製作を楽しむとよいだろう。オリジナル作品を製作するのも楽しいが、パネルシアターの脚本や型紙を取めた本が多く出版されているので、初めのうちはそれらを参考にするとよい。

(1) パネル舞台の作り方

用意するもの：パネル用の板（発泡スチロール板、プラスチック製ダンボールなど、薄くて軽いものが便利）、パネル布、布粘着テープ



①板よりひとまわり大きく切ったパネル布を広げ、中央に板を置く。



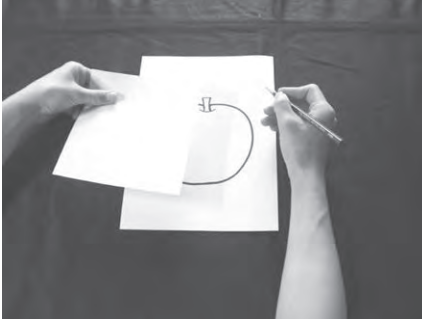
②余白部分を折り返し（折り返し部分をボンドでとめてもよい）、布粘着テープでとめる。表の面にしわがよらないように気をつける。



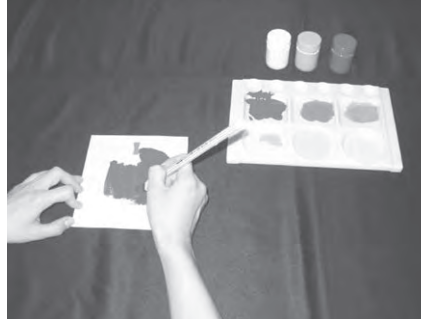
③余白部分を全部とめて、完成。

(2) 絵人形の作り方

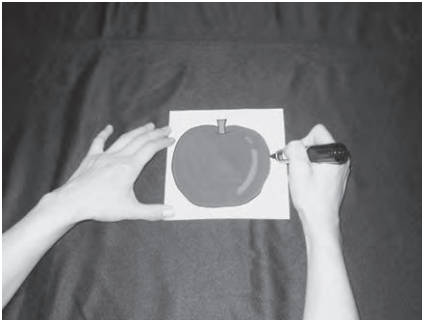
用意するもの：下絵、Pペーパー、鉛筆、黒の油性マジック、絵の具（ポスターカラー、アクリル絵の具など）、水入れ、絵皿、絵筆、ハサミ。
仕掛けの必要に応じて、ボンド、針、糸など。



①下絵を鉛筆でPペーパーにうつし取る。



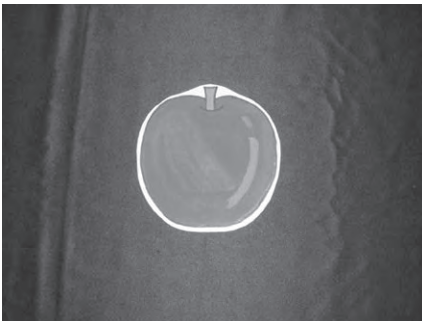
②うつし取った絵に着色する。



③絵の具が乾いたら、黒の油性ペンでふちどりをする。太目の線でしっかり書くと仕上がりが美しくなる。



④ふちどりにそって切る。細かい部分は折れやすいので、余白を残して切る。



⑤完成

【パネルシアター作成時の注意】

- ・ Pペーパー上に書いた鉛筆の線は消しゴムでは消えにくいので、注意する。鉛筆を使わず、初めから油性ペンで書いてもよい。
- ・ Pペーパーは通常白色のため、絵の白い部分には着色しなくてもよい。ただし、重ね貼りをする際に下に置いた絵が透けて見えるのを避けたい場合のように、白く色を塗った方がよい場合もある。

事例8-1 「かくれんぼ」

3歳児クラスで「かくれんぼ」を題材にしたパネルシアターを上演する。木の陰や草むらに隠れている動物の正体を類推して楽しむパネルシアターである。動物を隠すときは、その動物の体の一部が見えるように配置して、それがなんの動物なのか子どもたちが当てられるようにしておく。保育者の「ウサギさんはどこに隠れているのかな？」の声に対して、子どもたちは草むらを指さして「先生、そこそこ！」「そのところにウサギさんがいるよ！」と口々に答える。保育者が見当違いの場所を探そうとすると「そっちじゃないよー」「草、草の方にかくれてるよ！」と、ウサギの居場所を教えようと一生懸命である。ひとしきりパネルシアター上のかくれんぼを楽しんでから、保育者が子どもたちに戸外に出てかくれんぼをして遊ぼうと提案する。パネルシアターのかけ声と同じように、「どこに隠れているのかな～」と保育者が声をかけると、子どもたちはうれしそうに物陰に隠れ始め、かくれんぼ遊びが展開した。

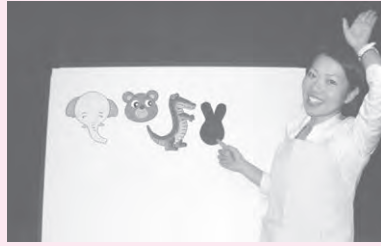


◀「かくれんぼ」
木のうしろに象、草むらにウサギやカニが隠れているのを見つける。

事例8-2 「これなーんだ」

保育者がパネルに絵人形をくっつけたりはがしたりしている様子を見て、子どもたちから「ぼくもやる！」「さわりたい」「わたしも！」という声がかかるようになった。保育者はシルエットクイズ形式のパネルシアターを用意した。黒く塗られた影の面を表にして「これなーんだ？」と問いかけると、子どもたちから「ゾウ！」と声がかかる。「そうかなあ。ゾウさんかな？」と言って絵人形を表に返してみると、ゾウの絵が描かれている。「当たり！よくわかったね。じゃあ次は？」と言って、新たに絵人形を貼る。「これなーんだ？」と尋ねると「ウサギ！」の声。「ウサギ？ ウサギさんかな？ じゃあAちゃん、前に出てきて裏返してみてください」と、Aちゃんに絵人形を裏返すように促す。Aちゃんが絵人形を裏返すと、ウサギの絵が描かれているので、正解したことを子どもたちと一緒に喜ぶ。パネルシアターの絵人形は普段は保育者が操作しているため、子どもたちは自分で動かせることに新

鮮な喜びを感じるようである。



「これなーんだ」▶
シルエットから動物の種類を類推する。

5 ブラックパネルシアター

パネルシアターは明るい室内で行うのが基本だが、暗くした室内でブラックライトという特殊な照明器具を用いて演じる方法があり、それを「ブラックパネルシアター」という。ブラックライトは蛍光塗料に反応するため、ブラックパネルシアターを作成する際は、絵人形を蛍光塗料で着色する必要がある。そうすることによって、暗闇のなかで絵人形だけが光って見えるのである。通常のパネルシアターと異なる点は室内を暗くして上演すること、ブラックライトや黒いパネル布を使うこと、絵人形を蛍光塗料で着色することで、これら以外には通常のパネルシアター上演と大きな違いはない*。七夕、夜空、おぼけ、花火、クリスマスなどの演目で用いると非常に効果的で、子どもたちは通常のパネルシアター上演とは趣の異なる幻想的な空間に驚き、その世界を楽しむのである。

*ブラックライトが反応しないように、演者は黒の服装で臨むとよい。

2. エプロンシアター

1 エプロンシアターについて

胸当て式のエプロンを舞台にした人形劇のことをエプロンシアターという。エプロンシアターは1970年代後半に考案された比較的新しい児童文化財で、現在では保育現場で広く活用されている。エプロンシアターと従来の人形劇芝居とのもっとも大きな違いは、舞台がエプロンであるという点であろう。大掛かりな機材や複雑な操作を必要としないため、エプロンと布人形があれば保育者ひとりで上演を始められるという点も、エプロンシアターの特長である。

エプロンシアターでは、演じ手の着けているエプロンが舞台の役割を果たす。登場人物はエプロンのポケットから登場し、必要に応じてエプロン上に置かれ、役割を終えるとまたポケットへと退場する。布人形がエプロン上にぴったりと付着するのは、マジックテープが縫いつけられているためである。子どもたちは、エプロンのポケットから次々と登場



▲誕生日を題材にしたエプロンシアター